

カーター・J・エッカート著，松谷基和訳

『韓国軍事主義の起源——
青年朴正熙と日本陸軍——』

慶應義塾大学出版会 2024年
xviii + 458 + 34 ページ

きむら かん
木村 幹

はじめに

地域研究とはいかなるものであるべきか。この点についての研究者の見解は、大きく2つに分かれているように見える。1つは地域研究を特定の地域や社会、さらにはその時代を「まるのまま」理解するものだと考えるものだ。時に地域を「つかむ」という表現も用いられ、この場合地域研究者はその地域における多方面な知識をもち、また、自ら固有の地域に対する独自の理解を有することが求められる。それは学術的な観点からいえば、地域研究者は時に自らが所属するディシプリンの領域を超える知識を有さなければならない、ということの意味している。

他方、地域研究とは単なる特定の地域をケースとする研究にすぎず、その成果は各々の研究者が属するディシプリンに資するべきものであるという考え方もある。評者自身の例を使えば、「韓国政治研究者」である評者は、基本的に政治学者であり、単にそのなかで韓国という地域、さらにはその地域において存在するさまざまなケースの分析を担当する研究者にすぎない、ということになる。

評者はかつてこの点について、後者の立場から文章を書いたことがあり [木村 2013]、基本的な姿勢は今も大きく変わっていない。その理由は簡単だ。ディシプリンに従って、特定のケースを分析することは、専門的な知識を学び、トレーニングを積み重ねれば誰だってできるようになる。つまり、加えて言語の習得をはじめとしたその地域のケースを分析するた

めの技能を追加すれば、誰でも後者の意味での地域研究者になることができる。特定のケースから抽出されたデータを具体的に示し、それを確立している手法で分析して結果を示せば、論文も比較的容易に書くことができる。

対して、地域や時代をまるごと「つかむ」という表現は極めて曖昧であり、具体的なゴールも明らかではない。意図されているのは、その地域の社会や人々を理解するための何かしらの重要な特徴、つまりは特異性を示せということであるが、どういう手段でそれを得ることができ、また何が得られれば目的が達成されたのかが明らかでない以上、その研究のための筋道を示すことは誰にもできない筈である。何をどう書けば、それを達成したことになるかわからない以上、アウトプットの方法もわからない。一種の名人芸であり、それを続く世代や学生等に教えることも不可能だ。

とはいえ、それでは地域研究者として、地域やその特定の時代をまるごと描き出すことに魅力がないか、といえそうではない。名人芸が名人芸である以上、それを後進に伝授することは不可能だが、さりとてそのことは名人芸が優れていないことや魅力的ではないことを意味しないからだ。

I 本書の内容

本書の著者、カーター・J・エッカートは、このような名人芸を演じられた数少ない地域研究者の一人であった。

まず本書の内容を簡単にみてみよう。本書は大きく第一部と第二部、そしてその全体の問題設定を確認する序論から構成されている。著者は序論において問題をこう提起する。朴正熙政権下の国家主導の開発独裁においては、韓国陸軍とそれが有する「軍事主義」の大きな影響をみることができる。この韓国陸軍が有した「軍事主義」は複数の源流をもつものであるが、とりわけ重要なのは大日本帝国陸軍の文化と行動様式であり、それを彼等に植え付けた日本式士官教育である。だからこそ、本書ではこの日本軍に由来する後の韓国の軍事主義のひな形がどのように彼等に受け継がれたのかについて、「厚い記述」と分析を提供するのだ、と。いうまでもなく「厚い記述」は有名なクリフォード・ギアツの概念であ

り、われわれはここにエッカートの著作の理論的・方法論的基盤のひとつをみることができる。

第一部はこの韓国における軍事主義の広まり、つまりは軍事化の歴史的背景を、マクロな変化をもって叙述するパートである。ここにおいて著者は、まず前提としての朝鮮王朝軍の在り方から、ウェスタンインパクト、つまりは西洋列強による非西洋地域への進出が朝鮮半島にも及んでからの朝鮮王朝や大韓帝国による軍事化の試みを記述する。つづいてそれが日本による大韓帝国軍の強制解散により挫折し、植民地化における日本の軍事主義の浸透と、1930年代以降の本格的な軍事化へ至る過程が描かれる。そしてそこでは、マクロな状況の変化から、総力戦期の朝鮮半島における軍事を象徴する人物としての朴正熙にかかわるミクロな描写へと次第に視点を入れ替えながら、話が進められる。

他方、続く第二部は一転して、日本により設置された2つの士官学校、すなわち、満州に設置された満洲国陸軍軍官学校と内地の陸軍士官学校で行われた教育とそれを取り巻く環境について着目する。ここではいったん朴正熙個人に対する直接的な描写は背景に退き、主役は精神としての軍事主義と、場所としての士官学校に移る。そしてこの士官学校に集った士官学校生徒たちの教育とその結果形成された特異なメンタリティーが繰り返し描かれることとなる。

II 本書の特徴

それではこのような本書は、どのような特徴を有するものとして理解されるべきであろうか。

この点については、改めて著者の人物について知る必要がある。著者のエッカートはローレンス大学で西洋古代・中世史の学士・修士を獲得した後、平和部隊の一員として、韓国に滞在した結果、この地域に関心をもつことになった人物である。帰国後、アメリカにおける韓国学の主要な創始者の一人であるワシントン大学のジェイムス・B・パレイ [Baker 2007] による薫陶を受けた彼は同大学で博士号を取得し、1985年からはハーバード大学にて教鞭をとり、多くの後進を育て、アメリカ国内のみならず世界各地において活躍する韓国学研究者を生み出すこととなった [Korea Institute 2024]。

そのような彼の研究の大きな特徴は、専門を歴史学としながらも、単に個々の歴史的事実を個別的且つ実証的に示すのみにとどまらず、その時代や社会の構造を「それ自身」として示そうとしたことにある。このような彼の特徴が典型的に表れたのが、本書の前著ともいえる *Offspring of Empire: The Koch'ang Kims and the Colonial Origins of Korean Capitalism, 1876-1945*, Seattle: University of Washington Press [Eckert 1991] (邦訳『日本帝国の申し子——高敞の金一族と韓国資本主義の植民地起源 1876-1945——』, 草思社, 2004年)であろう。同書において著者は、京城紡織や東亜日報の創始者として知られる金性洙を中心とする一族の活動を通じて、朝鮮半島の経済的近代化における、日本統治のインパクトを描き出した。

この前著の構成でも明らかのように、著者が主たる関心を向ける歴史的現象は、韓国が現在のような状況に至るまでに、どれほど大きな影響を日本とその植民地支配が与えたか、に他ならない。このような著者の視点は時に「植民地近代化論」の枠組みで捉えられ、結果、韓国の一部の研究者からは「日本による植民地支配を肯定的に捉えるもの」として批判されてきた。逆に日本国内では、植民地支配に関して「日本はよいこともした」と主張したい人々により都合のよい著作として「歓迎」される事態さえ起こり、さまざまな政治的意図をもつ人々により、その評価は大きく揺れ動いてきた。

もちろん著者は元来、このような左右のイデオロギー色の強い議論とは距離をおく人物であり、これらの議論はともに著者の意をふまえたものではない。そしてそのような著者の本来の意を、さらに明確にすることとなったのが、2016年に出版された本書の原著 *Park Chung Hee and Modern Korea: The Roots of Militarism, 1866-1945*, Cambridge: Belknap Press [Eckert 2016] であった。

本書において著者が扱ったのは、前著と同じく日本とその植民地支配が朝鮮半島においてもたらした変化であるが、この変化が韓国に与えた影響の性格は前著が取り上げた資本主義のそれとは大きく異なるものであった。なぜなら、資本主義が一面では経済的發展というプラスの効果をもたらすものであったのに対し、ここで取り上げられた軍事主義は、多くの文脈において肯定的には取り上げられないもの

であったからである。

著者はこの朝鮮半島における軍事化の動きを、朝鮮王朝期における軍隊の在り方にまで遡って描写する。垣間見えるのは、エッカートにとっては博士課程における指導教員に当たる、ジェイムス・B・パレイの影響である。パレイはその主著である *Politics and Policy in Traditional Korea*, Cambridge: Harvard University Press [Palais 1975] にて、前近代における朝鮮王朝の構造が如何にウェスタンインパクト期の政治に影響を与えたかを論じている。エッカートの2冊の主著はともにこのパレイが示した前近代の朝鮮半島社会の構造を前提に、その後の近代化の在り方を論じていることにおいて、共通した構造を有している。

しかし、それはエッカートがパレイと同じ朝鮮半島に対する視点を有していたことを意味しない。なぜなら、同じく現代の韓国につながる問題を意識しながらも、パレイがその主たる出発点を前近代における朝鮮半島社会の在り方においたのに対し、エッカートは、決定的な転換点を日本からの影響に求めたからに他ならない。すなわち、前著においてそれは、「軍事独裁政権」としての性格を有する朝鮮総督府による経済近代化政策とその背後にあった日本資本主義であり、著者はその影響を金性洙一族に代表される「新世代」に着目する形で描き出した。

そして本書の語りの構造は、この前著と基本的に同じになっている。すなわち最初に軍事や軍隊に否定的な傾向をもつ朝鮮王朝の様子が描写され、そこからウェスタンインパクトを経て、軍事的近代化が開始される様子が示される。しかし、この朝鮮半島における軍事化の「第一波」は、1907年における軍隊廃止と3年後の韓国併合によって終了し、朝鮮半島は植民地化される。

この後、植民地支配下で日本の「軍事主義」的価値観が人々の間に浸透し、朝鮮半島における「精神の軍事化」が進行する。しかし、著者が本当に注目するのは、日本統治下における軍事化が本格的に開始される1930年代、すなわち満州事変を経て日本が総力戦体制に移行する時期以降の状況である。著者はこれを朝鮮半島における軍事化の「第二波」と呼んでいる。

エッカートの叙述の特徴は、朝鮮半島における社会や経済の大きな変化を説明する際に、単にマクロ

なデータからの全体的な変化を示すのみならず、その変化を体現した特定の人々や集団に着目し、彼等のミクロな変化や行動からこれを描写しようと試みることである。このようなミクロな描写を行うために選ばれたのが、彼の前著においては金性洙とその一族であり、本書においては朴正熙と士官学校に集った人々だ、ということになる。

そしてそのことは言い換えるなら、エッカートが金性洙の一族や朴正熙と士官学校に集った人々を取り上げた原因が、必ずしも彼等が韓国の経済的近代化や開発独裁国家の成立において重要な役割を果たしたからだけではないことを意味している。そもそもエッカートは彼らの遍歴にかかわる叙述を2つの著作において、ともに植民地支配終焉までの段階にほぼ留めており、本書でも朴正熙等にかかわる描写は彼等が満州から朝鮮半島に帰国した段階で終わっている。言い換えるなら、多くの人々が最も大きな関心を向けるであろう、彼等が解放後、あるいは大韓民国建国後にどのような役割を果たしたのかについては、エッカートは何も直接論じない。方法論的にはマクロな現象を説明するに当たって、特定のケースを選択してはいるものの、そのケースがマクロな現象のなかでどういう重要性があるのかについては、必ずしも実証的に裏付けていないことになる。

Ⅲ 「場所」としての士官学校への着目

とはいえ、そのことは本書が前著と完全に同じ構造をとっていることを意味しない。たとえば前著においては、朝鮮半島の経済や社会に対する描写と、金性洙一族の状況に対する描写が交互に現れるのに対し、本書はマクロな状況の変化を述べる第一部と、士官学校を舞台としたミクロな状況を描写する第二部に大きく切り分けられている。本書の叙述がこのような体裁をとることとなった理由として考えられるのは、著者が軍事化を考える上で、軍事主義の中身ともいえる「精神」や、その担い手である「人」に加えて、それが育まれる「場所」を重視する形でその分析を行っているからであろう。

つまり、前著においてはマクロな変化の主体である資本主義と、そのミクロな担い手である金性洙一族のみがあったのに対し、本書ではマクロな変化の主体である日本を源流とする軍事主義とそのミクロ

な担い手である朴正熙と士官学校に集った人たちに加えて、新たに「場所」としての士官学校が加えられている。そしてそれこそが叙述面における本書の最大の特徴であり、著者の工夫が最も顕著に表れている部分になる。

そしてこのような本書における「場所」としての士官学校への着目とその「厚い記述」こそが、朝鮮半島の社会を大きく描き出そうとする著者の「名人芸」に大きく寄与することとなっている。なぜなら「場所」を具体的に示すことにより、著者は読者の視点を朝鮮半島全体のマクロな状況から、士官学校におけるミクロな日常的状況へと切り替えることに成功しているからである。

本書においてさらに興味深いのは、著者が朝鮮半島における軍事化の「第二波」の描写をする場所として選んだ士官学校が、満州や日本といった朝鮮半島の外に存在することかも知れない。そこには師であるパレイが韓国社会の起源を朝鮮半島社会の内部に求めたのに対し、エッカートが外部からの影響を重視している、という違いが典型的に表れることになっている。朝鮮半島における重要な社会現象を理解するためには、朝鮮半島内部だけではなく、それに影響を与える外部とのかかわりが重要だ。そこにはこのような著者のメッセージが込められているようにみえる。

だからこそ本書における後半部分の語りは次のようになる。総力戦体制へと向かう日本は、やがて朝鮮半島における人的資源の軍事的利用を必要とするようになり、結果すでに軍事主義的な価値観が広まっていた朝鮮半島から、満州や内地の士官学校へと人々が押し出されることになる。そして、押し出された人々はこの士官学校という軍事主義の濃縮された空間で英才教育を受け、その真髄を叩き込まれる。その典型的な人物の一人こそが朴正熙であり、彼等はやがて解放後の朝鮮半島へと舞い戻り、韓国のさらなる軍事化——つまりは韓国における軍事化の「第三波」——を遂行することになるのだと。

むすびにかえて

すでに述べたように、エッカートは彼らが解放後の韓国においてどのような具体的な役割を果たし、どのようにその社会を変えたか、そしてそもそも韓

国における軍事主義が如何なるものであったか、については黙して直接には語らない。代わりに本書において多くのページ数を割かれているのは、満州や内地の士官学校で生徒達がおかれた特殊な環境であり、またそこで流布された文化や価値観である。

それゆえに、その原書における *Park Chung Hee and Modern Korea* という本題にもかかわらず、本書では朴正熙にかかわる描写は実は多くない。なぜなら、本書における主役はあくまで「精神」としての軍事主義であり、朴正熙や士官学校に集う人々は、この「精神」の乗り物にすぎないからである。翻訳に当たった松谷基和が訳者あとがきで明確に述べているように、邦訳である本書の表題が原書の本題と副題を入れ替えて、『韓国軍事主義の起源——青年朴正熙と日本陸軍——』となっているのも、エッカートの教え子の一人である松谷がこの著者の意を上手く汲んだ結果であるといえる。

こうしてみると著者の真のねらいが何かもわかる。それはすなわち、解放後において全盛をふるった韓国の軍事主義がいかなる経緯でできてきたかを描写することであり、この描写自体を通じてその軍事主義が如何なるものであったかを読者に再現してみせることである。

その結果として、士官学校という場所における軍事主義の描写を終えると、著者はその筆をおくことになる。なぜなら、朴正熙とその開発独裁政権の在り方を知る者なら、それが韓国の1960年代から70年代と同じ「空気」のもとにあることが、自ずからわかるであろうからである。

とはいえ、そのことは本書が一定の限界を有していることも示唆している。本書が歴史のゴールとしているのは、1960年代から70年代における朴正熙政権とその開発独裁体制、とりわけ1972年の維新革命以後のそれである。そこにウェスタンインパクト期から脈々と受け継がれ、日本による植民地支配の影響を色濃く受けた韓国陸軍独特の軍事主義の影響をみることは確かに容易である。

しかしながら問題は、その韓国の軍事主義がその後の韓国に如何なる影響を与え、現在に至るまでの韓国にどのような影響を与えたか、である。この点について著者は、本来、本書の「下巻」を構想しており、そこで詳しく議論する筈であった、という。

しかし結局、その下巻は世に問われることはな

かった。カーター・J・エックアートは、2024年12月13日にアメリカはマサチューセッツ州ケンブリッジにて逝去。単に一次史料を示すだけでなく、さまざまな史料を用いて器用に場面を切り替えつつ、朝鮮半島の社会が、如何なる影響を日本をはじめとする外部勢力から受け、作り出されてきたかを巧みに描写した、エックアートの「名人芸」はもうみられない。いや、それはあるいは彼がわれわれに残した「宿題」なのかも知れない。「今度はあなた方の番ですよ」、彼がそう呼びかけているように本書を読んでも、大きな間違いではないのかもしれない。

文献リスト

〈日本語文献〉

木村幹 2013. 「『地域研究』12巻2号 特集へのコメント」
「名人芸」からの脱却を——総特集「地域研究方法論」
を読んで—— 『地域研究』13(2).

〈英語文献〉

Baker, Don 2007. “James B. Palais (1934-2006).” *Journal of Asian Studies* 66(4).

Eckert, Carter J. 1991. *Offspring of Empire: The Koch'ang Kims and the Colonial Origins of Korean Capitalism, 1876-1945*. Seattle: University of Washington Press (邦訳は小谷まさ代訳『日本帝国の申し子——高敞の金一族と韓国資本主義の植民地起源 1876-1945——』草思社, 2004年).

—— 2016. *Park Chung Hee and Modern Korea: The Roots of Militarism, 1866-1945*. Cambridge: Belknap Press (邦訳は松谷基和訳『韓国軍事主義の起源——青年朴正熙と日本陸軍——』慶應義塾大学出版会, 2024年).

Korea Institute 2024. “Carter J. Eckert.” Harvard University.

<https://korea.fas.harvard.edu/people/executive-committee/carter-j-eckert> (最終確認 2025年4月11日)

Palais, James B. 1975. *Politics and Policy in Traditional Korea*. Cambridge: Harvard University Press.

(神戸大学大学院国際協力研究科教授)